

## スポーツ研究センター

## I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2019年度大学評価結果総評】(参考)

調査研究、学生の健康維持増進、体育施設の運営など、スポーツ研究センターの従前からの任務に加え、近年は体育会の強化、大学のイメージやプレゼンスの向上、社会や地域への貢献と還元などにも尽力されていると推察される。人的資源や予算も限られた厳しい環境下において、対外的に発表された研究成果は書籍・論文等 67 点をはじめとして多数に上る。また研究成果に対する社会的評価においても、2018 年度に引用された回数が 63 回であり、高く評価できる。科研費等外部資金の応募・獲得状況は科学研究費が 6 件、それ以外の公的研究費 2 件と組織規模に比して多数に上り、この点においても高く評価することができる。全体的にバランスの取れた運営のもと、今後の研究活動の連携と相互活性化という観点からの共同プロジェクト構築への取り組みは、貴センターの次の展開につながるものと思われ期待できる。

このような質・量ともに充実した研究・社会貢献活動について外部に発信するため、ホームページを充実したものにすることは貴センターの社会的プレゼンスを高めるために大変効果的だと考えられる。早期のホームページのバージョンアップが望まれる。

また、センターに対する外部からの組織評価については行われてはいないが、2019 年度よりセンター内に設置される質保証委員会が組織内の客観的立場から評価を行う予定とされており、今後の成果に期待したい。

## 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

昨年度の評価において、「ホームページのバージョンアップ」が挙げられているが、この点については、各所員の研究や社会貢献活動に関して頻度を高めながら発信するように努めていきたい。

また 2019 年度に質保障委員会が立ち上がり、一定の評価を受けている。今後も研究センターの活動の質が全般的に向上するように努めていきたい。

## 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

スポーツ研究センターが 2019 年度大学評価委員会の評価結果において指摘されていた 2 点、すなわち貴センターのホームページの充実化と質保証委員会の活動については達成されており、評価できる。また、この達成にとどまることなく、さらなる改善・向上に向けた持続的努力の姿勢が示されており、この点も評価できる。元来、貴センターは、多種多様な分野の所員を抱え、それに対応した多彩な研究とその成果が公表されており、外部資金獲得の努力とその実績、そしてそれに基づく成果の創出も見事である。そうした研究にはグローバル化への対応も見取れる。さらに、体育会の強化（アスリート育成）など大学ブランド化への貢献もあり、学内外に開かれた行事の主催や所員のマス＝メディアへの出演など持続的な社会貢献・社会連携もある。すでにそうした完備した体制の中で、さらなる向上をめざしており、その成果の検証が期待される。

## II 自己点検・評価

## 1 研究活動

## 【2020年5月時点における点検・評価】

## (1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

## ①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2019 年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

## 【スポーツ研究センター内】

2019 年度は 8 つの研究プロジェクトを実施した。

- ①学生アスリートの心理社会的スキルの獲得状況に関する検討
- ②大学生アスリートの e スポーツ実施に関する実態調査
- ③アスリートが実感する一体感を高める有効な手立て
- ④ボクシング動作を用いたエクササイズプログラムの開発と運動強度検証
- ⑤スポーツイベントにおける社会的影響に関する調査研究
- ⑥小学生年代のサッカー選手におけるパフォーマンスおよびフィジカルチェックに関する調査・研究
- ⑦レジスタンス運動が血管内皮機能に及ぼす影響-性差に着目した検討-

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

## ⑧在学生の大学スポーツに対する認知度並びに評価が大学への帰属意識に与える影響

2019年度末からの新型コロナウイルス感染拡大を受け、年度末に開催予定であったプロジェクト報告会は開催できなかったが、各プロジェクトの報告書を作成し、所員間で情報共有を行った。

## 【対外的活動】

● (プロジェクト) 『レジスタンス運動が血管内皮機能に及ぼす影響 -性差に着目した検討-』, 2019年8月1日～2019年12月20日, 法政大学(東京都)

レジスタンス運動が血管内皮機能に及ぼす影響の性差を検討した。その結果、レジスタンス運動における血管内皮機能の低下は男性にのみで生じ、女性では生じないことが明らかになった。また、この性差の機序には、レジスタンス運動中における血圧応答の違いが関与している可能性が示された。

本研究の成果は Journal of Applied Physiology に投稿した(現在査読中)。

● (研究会大会) 『日本野球科学研究会第7回大会』, 2019年11月30日～12月1日, 法政大学(スポーツ健康学部棟), 普及と育成そのカタチ, 一般研究発表77題とシンポジウム3・講演2, 野球の指導者と研究者 約280名, 平野裕一

● (セミナー) 『八王子スポーツカレッジ:メンタルトレーニング・ベーシックス』, 2019年5月23日・6月6日・八王子スポーツ整形外科(東京都), 内容:講師担当, 荒井弘和

● (セミナー) 『日本スポーツ協会共通科目Ⅲ集合講習会』, 2019年8月22日～25日・KFCホール(東京都), 内容:コーチデベロッパー担当, 荒井弘和

● (セミナー) 『グッドコーチング・セミナー』, 2019年9月17日・PHP研究所東京本部(東京都), 内容:講師担当, 荒井弘和

● (セミナー) 『日本スポーツ協会共通科目Ⅲ集合講習会』, 2019年10月17日～20日・ベルサール九段(東京都), 内容:コーチデベロッパー担当, 荒井弘和

● (セミナー) 『野球に役立つ走動作トレーニングおよび筋力トレーニング』, 2019年7月16・19・22日, 法政大学(神奈川県), 本学硬式野球部を対象に走動作および筋力トレーニングのレクチャーを行った。杉本龍勇

● (セミナー) 『実践!グッドコーチング』セミナー, 2020年2月26日, エステック情報ビル(東京都), テーマ:グッドコーチングの実践と普及を目指して, 内容:日本バレーボール協会に加盟する47都道府県協会と全国連盟の代表者を対象として, わが国のバレーボール界で未だ絶えない指導中のパワーハラスメントを無くし, コーチが今日に求められるコーチングを実践する上で, 重要となる思考・判断や態度・行動に関する情報提供を行った。山田快

● (セミナー) 『アスレティック・トレーナー・キャリア・サポート・アカデミー』, 2019年2月6日, 国立スポーツ科学センター, AT活動およびATの現実と未来, 約20名, 泉重樹

● (セミナー) 『埼玉県鍼灸師会 第一回学術講習会』, 2019年7月21日, さいたま市, アスリートの腰痛に対する鍼治療～機能評価を指標とした鍼治療の例～, 約50名, 泉重樹

● (セミナー) 『湘南スポーツメディスン01』, 2019年9月29日, 横浜市, アスリートにおける体幹機能評価～アスレティックトレーナーの立場から～, 約60名, 泉重樹

● (セミナー) 『International Judo Seminar』, 2019年8月20日, 鹿屋体育大学, 国際柔道セミナー, 各国から訪れた柔道関係者を対象に, 日本柔道の文化的側面を講演するセミナー, 15名, 永木耕介

● 『CEHD INTERNATIONAL SPEAKER SERIES』, 2020年2月27日, ミネソタ大学(ミネソタ州), Physical fitness and

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

physical activity environment of preschool children in Japan, 内容：日本の子供たちの体力の推移を解説し、自身の研究成果も含めて体力向上を目指した我が国の取り組みについて、CEHD(College of Education and Human Development)の客員研究員、院生および教員に向けて解説した。高見京太

- (フォーラム)『多摩未来塾』, 2019年6月9日, ベネッセ多摩本社(多摩市), 「スポーツ, 教育とビジネスのコラボのあり方を考える」, パネリスト/スポーツ・教育・ビジネスの現代的関わりに関する将来像検討, 研究者/自治体関係者 約200名, 山本浩
- (フォーラム)『女性スポーツの集い』, 2019年7月13日, 川越市やまぶきホール(川越市), 「一人一人の声を聞け」, 講演/スポーツ選手育成の現場で大切にされている考え方, 女性スポーツ指導者・川越市民など, 400人, 山本浩
- (セミナー)『東京都教育庁八丈出張所管内夏期教員研修』, 2019年8月28日, 東京都八丈支庁(八丈町), 「ことばのパワーを感じて」, 講演/教育の現場で配慮すべきコミュニケーション, 島嶼部教職員 30人, 山本浩
- (セミナー)『JOC ナショナルコーチアカデミー』, 2019年9月11日, ナショナルトレーニングセンター(北区西が丘), 「ことばのパス」, 講演/指導者の知っておくべきコミュニケーション, JOC強化コーチ80人, 山本浩
- (セミナー)『北海道タレントアスリート発掘・育成事業』, 2019年9月22日, 大塚製薬札幌支店(札幌市), 「自己紹介を考えよう」, 講演/若きアスリートが身につけておくべきコミュニケーション能力, 北海道内ユースアスリート並びに指導者 40人, 山本浩
- (セミナー)『日本サッカー協会 S級ライセンス講習会』, 2019年11月7日, 北区西が丘(国立スポーツ科学センター), 講義/「プロの指導者が覚えておくべきコミュニケーションとメディア対応」, S級ライセンス取得希望サッカーコーチ 20人, 山本浩
- (セミナー)『横須賀サッカー協会指導者講演会』, 2019年11月10日, 横須賀市, 講義/「サッカーでつながる 横須賀」 横須賀サッカー協会登録指導者・協賛社 20人, 山本浩
- (セミナー)『秋田県スポーツ少年団指導者研究協議会』, 2019年11月16日, 秋田市, 講演/「勝負の石はこうして積まれる」(指導者と競技者の関係論), 秋田県少年スポーツ指導者 50人, 山本浩
- (シンポジウム)『玉名地域づくりシンポジウム』, 2019年12月7日, 熊本県玉名市, 講演/金栗スピリッツと玉名のこれから(地域おこしとスポーツ), 自治体, 地域スポーツ関係者 50人, 山本浩
- (セミナー)『東信五市議会議員研修会』, 2020年1月15日, 長野県千曲市, 講演/おもてなしの灯を点せ(東京五輪・パラリンピックと地域との連携はどうあるべきか), 長野県東部5市議会議員 80人, 山本浩
- (セミナー)『(公財)日本エアロビック連盟 JapanNationalCamp』, 2020年2月8日, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 講演/スポーツは社会に育つ スポーツの環境と指導との関わりについて, エアロビックプロコーチ 30人, 山本浩
- (シンポジウム)『滋賀県スポーツ協会加盟都市体育・スポーツ協会研修会』, 2019年7月10日, ピアザ淡海305号会議室(滋賀県), テーマ:国スポ・障スポにおける地域スポーツ団体の関わり方:イベントレガシーをマネジメントする, 内容:これまでの国民体育大会を通じて形成されたレガシーとその創出方法, 参加者:滋賀県の市町のスポーツ協会の関係者を対象に, 吉田政幸
- (セミナー)『筋力とパワーの科学』, 2019年7月21日, 法政大学(神奈川県), 本学硬式野球部を対象に, 筋力トレーニングおよびパワーの科学に関して基礎的理論から野球への応用までレクチャーした。森嶋琢真

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- (講演)『GSC アスリートクリニック』2019年4月27日, 御殿場市総合体育館, 御殿場市の小学生・中学生およびその保護者, 指導者を対象に走り方の指導方法を講演し, その後実技指導を実施した。杉本龍勇
  - (講演)『第39回大学職員セミナー』2019年7月5日 法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナードタワー26階, 公益財団法人大学セミナーハウス主催のセミナーにおいて,「大学スポーツの現在」と題して, 大学スポーツが置かれている現状と今後の方向性について講演した。杉本龍勇
  - (講演)『野球に生きる走動作とトレーニング方法東』2019年8月22日 楽天生命パーク宮城 東北楽天ゴールデンイーグルス スクールコーチに対して野球のパフォーマンスと効果的な走動作の相互作用について講演した。また, 講演の内容に従って実技指導も実施した。杉本龍勇
  - (講演)『令和元年度「東京都障害者スポーツ選手育成事業」育成プログラム「トレーニング概論」』2019年11月23日 東京都多摩障害者スポーツセンター, パラアスリートを対象に, トレーニング方法の理論と具体的な内容について講演した。杉本龍勇
  - (講演)『第52回西置賜地区スポーツ協議会 指導者・育成母集団研修会』2019年11月30日 山形県長井市 青少年対象のスポーツ指導方法に関して講演。杉本龍勇
  - (講演)『神奈川県スポーツ指導者スキルアップ講座』2019年12月21日 川崎市高津スポーツセンター, 神奈川県のスポーツ指導者を対象に,「多様な種目に活用できる走り方とその指導方法」について講義を行い, その後実技指導を実施した。杉本龍勇
  - (講習)『スポーツ心理学』, 2020年1月11日, 戸田公園(埼玉県), 公益社団法人日本ボート協会が主催する平成31年度公認コーチ養成講習会において, 公認コーチの取得を目指す受講者に対してスポーツ心理学に関する講習会を実施した。中澤史
  - (講演)『おもてなしの日本 毅然としたドイツ』, 日本スポーツ歯科医学会, 2019年6月28日, 鹿児島市, 山本浩, スポーツと歯科医学の関わりを中心として日独競技者育成の比較講演
  - (講演)『三つ子の魂は社会が決める』, 福岡県小児科医会総会, 2019年7月6日, 福岡県久留米市, 山本浩, 乳幼児の育て方から始まるスポーツ環境の考え方の相違がアスリートの違いにどう影響するか
  - (講演)『アスリートは大地が作る』, 関西大学社会学部学術講演会, 2019年7月8日, 大阪府吹田市, 山本浩, 東京五輪を前にした諸外国の競技スポーツ育成環境の違いを比較
  - (講演)『実況アナウンサーの世界』, スポーツ言語学会総会, 2019年10月6日, 千代田区神田駿河台, 山本浩, スポーツ実況放送の準備から実行まで,
  - (講演)『アスリートは大地に生まれる』, Jリーグドクター会(Jクラブチームドクター50人), 2020年1月12日, 文京区本郷(JFAハウス), 山本浩, 欧米アスリートの身体作りから教育, 指導まで
5. コラム(新聞, 刊行物), テレビ出演, ラジオ出演
- (コラム) 静岡新聞社(朝刊)時評.『五輪, W杯名のスポーツ報道』2019年6月5日, スポーツの世界的メガイベント前の報道機関の情報提供に関して, スポーツ本来の魅力を全面に出した内容の重要性について説明した。杉本龍勇
  - (コラム) 静岡新聞社(朝刊)時評.『東京五輪・パラ開幕まで1年』2019年8月1日, 2020年7月開幕の東京五輪・パラ大会に向け, 開催期間中の内容を準備するだけでなく, 大会後の様々なレガシー効果の創出に向けたビジョンならびに準備, そして実践することの重要性を説明 杉本龍勇

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『企業スポーツの継続』2019年10月2日, 多くのスポーツがプロ化する, あるいは目指す中で, これからの企業スポーツの意義について説明し, 現在我が国が政策として推進している働き方改革のモデルケースになれる可能性について示した。 杉本龍勇
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『ラグビー「にわかファン」』2019年11月28日, 2019年ラグビーW杯日本大会で生まれたラグビーの「にわかファン」に対する大会後の対応について, 長期的な視点からコアなファンにするための意見を述べた。 杉本龍勇
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『道具の進化とパフォーマンス』2020年2月12日, マラソンの「厚底シューズ」が注目を集める中, 選手のパフォーマンス進化は道具によるモノより, 自身のトレーニング内容およびその他の要素が大きな影響を与えていることを説明した。 杉本龍勇
- (コラム) 『一歩先を行くフィジトレ』footies! solmeda, 高校サッカー選手向けのフィジカルトレーニングを紹介している。 杉本龍勇
- (コメント) 東京新聞・中日新聞 (朝刊) 2019年10月18日, 東京五輪において開催される競歩およびマラソンの札幌開催への変更に対して。 杉本龍勇
- (コメント) 毎日新聞 (朝刊) 2019年11月7日, 2019年ラグビーW杯日本大会での台風による試合開催の中止を受け, 2020年開催の東京五輪・パラ大会への教訓および対策についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 静岡新聞 (朝刊) 2020年1月6日, 2020年開催予定 (当時) の東京オリンピックに対する期待についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 東京スポーツ 2020年1月21日, 東京五輪出場が有力視され, そこでの活躍が期待されるサッカーU23代表の堂安律選手に関して, トレーニング内容などをコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 東京新聞 2020年3月4日, コロナウィルスの感染拡大を受け, 2020年東京五輪の開催可否 (中止や延期を含む) について, 経済的な視点ならびにアスリート側の考えに基づく対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 静岡新聞 (朝刊) 2020年3月24日, 2020年東京五輪・パラ大会の開催延期を受け, 延期日程の決定条件について現状分析をコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 静岡新聞 (夕刊) 2019年8月30日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 中日 (夕刊) 2019年8月30日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 信濃毎日新聞 (夕刊) 2019年8月30日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 東奥日報 2019年8月30日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 京都新聞 (夕刊) 2019年9月6日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 北海道新聞 (夕刊) 2019年9月2日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 北海道新聞 (夕刊) 2019年9月2日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 日本経済新聞 (夕刊) 2019年9月2日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

- (コメント) 河北新報 (夕刊) 2019年9月2日, 2019年ラグビーW杯の喫煙対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 東奥日報 2019年12月12日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 信濃毎日新聞 (夕刊) 2019年12月13日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 沖縄タイムス 2019年12月13日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 神戸新聞 (夕刊) 2019年12月13日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 信濃毎日新聞 (夕刊) 2019年12月13日, 2020年東京オリンピックの有給スタッフの対応についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 日本経済新聞 (夕刊) 2020年2月29日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 信濃毎日新聞 (夕刊) 2020年2月29日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 秋田さきがけ新聞 2020年3月1日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 四国新聞 2020年3月1日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 愛媛新聞 (夕刊) 2020年3月2日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇
- (コメント) 琉球日報 2020年3月2日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメントした, 杉本龍勇
- (コメント) 愛媛新聞 (夕刊) 2020年3月2日, 2020年東京オリンピックのチケット店頭優先販売についてコメント, 杉本龍勇

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・【2019年研究プロジェクト】 プロジェクト

## ②対外的に発表した研究成果 (出版物、学会発表等)

※2019年度に研究所 (センター) として刊行した出版物 (発刊日、タイトル、著者、内容等) や実施した学会発表等 (学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等) の詳細を記入。

### 1. 書籍 (商業雑誌等含む)

- 『おうち筋トレ』「運動が苦手でもできる“ゆる筋トレ”」, 伊藤マモル, 2020年3月20日  
日経ヘルス編, p. 34-39, 年齢とともに結果が出にくくなるダイエットの原因の一つに筋肉の硬さがあることを指摘。運動不足で急な運動が危険な人に向けた筋肉をほぐす軽度な運動の意義, 理論, 実践方法を表した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 『健康心理学事典』, 荒井弘和, 2019年10月, 丸善出版, P.486- P.487, 「運動行動, 身体活動のカウンセリング」の執筆を担当
- 『グッドコーチになるためのココロエ』, 平野裕一・土屋裕睦・荒井弘和 (編), 2019年7月, 培風館
- 『注意を向けるべき「場所」について』 中澤 史, 2019年4月5日, Tennis Classic Break No.486, P.46-P.47
- 『覚悟が集中力を高める』 中澤 史, 2019年4月15日, 月刊バレーボール第73巻第5号, P.68 - P.69.
- 『注意力の向け方でパフォーマンスは変わる! ?』 中澤 史, 2019年5月5日, Tennis Classic Break No.487, P.46-P.47.
- 『プレー中に注意を向けるべき場所』 中澤 史, 2019年5月15日, 月刊バレーボール第73巻第6号, P.70 - P.71.
- 『“読む力”を磨く方法』 中澤 史, 2019年6月5日, Tennis Classic Break No.488, P.106-P.107.
- 『予測力を強化するエキスパートシステム』 中澤 史, 2019年6月15日, 月刊バレーボール第73巻第7号, P.74 - P.75.
- 『手のひらの感覚』 中澤 史, 2019年7月5日, Tennis Classic Break No.489, P.11.
- 『一歩先ゆく予測力を向上させるには! ?』 中澤 史, 2019年7月5日, Tennis Classic Break No.489, P.104-P.105.
- 『予測力の向上に有効な知覚トレーニング』 中澤 史, 2019年7月15日, 月刊バレーボール第73巻第8号, P.82-P.83.
- 『予測力を創造するエキスパートシステム』 中澤 史, 2019年8月5日, Tennis Classic Break No.490, P.100-P.101.
- 『プレッシャーがパフォーマンスに与える影響』 中澤 史, 2019年8月15日, 月刊バレーボール第73巻第9号, P.142-P.143.
- 『プレッシャーとパフォーマンスの関係』 中澤 史, 2019年9月5日, Tennis Classic Break No.491, P.90-P.91.
- 『上級者が実戦するクワイエットアイ』 中澤 史, 2019年9月15日, 月刊バレーボール第73巻第10号, P.44-P.45.
- 『「ミスしてはいけない」と思うほどミスしてしまうのはなぜ?』 中澤 史, 2019年10月5日, Tennis Classic Break No.492, P.90-P.91.
- 『なぜ「ミスしてはいけない」と思うとミスしてしまうのか?』 中澤 史, 2019年10月15日, 月刊バレーボール第73巻第13号, P.46-P.47.
- 『ハイ・パワーポーズのススメ』 中澤 史, 2019年11月15日, 月刊バレーボール第73巻第15号, P.142 - P.146.
- 『悪いクセのなおし方』 中澤 史, 2019年12月15日, 月刊バレーボール第74巻第1号, P.160 - P.161.
- 『ホームアドバンテージは存在するのか?』 中澤 史, 2020年1月15日, 月刊バレーボール第74巻第2号, P.146 - P.147.
- 『なぜ人に見られるとパフォーマンスは低下するのか?』 中澤 史, 2020年2月15日, 月刊バレーボール第74巻第3号, P.138 - P.139.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 『ユニフォームが与える心理的効果』 中澤 史, 2020年3月15日, 月刊バレーボール第74巻第4号, P.156 - P.157.
- 『Extreme and Rare Sports:Performance Demands, Drivers, Functional Foods, and Nutrition』, Ochi, E., and Tsuchiya, Y., 2019年06月, Taylor and Francis pp.321-340, "Chapter 18 Skeletal Muscle Damage and Recovery from Eccentric Contractions"を担当
- 『筋肉研究最前線—代謝メカニズム, 栄養, 老化・疾病予防, 科学的トレーニング法』, 越智英輔, 2019年09月, エヌ・ティー・エス, pp.271-279 "第4章2節 筋損傷抑制するためのオメガ3脂肪酸の摂取について"を担当
- 『アスレティックトレーニング学』. 広瀬統一, 泉重樹, 上松大輔, 笠原政志 編集:文光堂. 東京. 2019/12
- 『グッドコーチになるためのココロエーWebアシスト付』. 平野裕一, 土屋裕睦, 荒井弘和 (編集):培風館. 東京. 2019/7 (分担: 泉重樹. 第4章 アスリートの休養・睡眠. 129-135, コラム6 熱中症対策. 136-137)
- 『健康運動指導士試験要点整理と実践問題』, 稲次潤子(監修), 上岡尚代, 野田哲由, 田辺達磨(編集), 2019年8月5日, 文光堂, p.61-p.82, 第IV章運動生理学の執筆を担当, 高見京太
- 『The legacy of Kano Jigoro :Judo and Education』, The Committee for the Commemoration of the 150<sup>th</sup> Anniversary of the Birth of Jigoro Kano (Translated by Tom Kain), Japan Library : Japan Publishing Industry Foundation for Culture, March 2020  
本書は、「嘉納治五郎・生誕150周年記念委員会」が『気概と行動の教育者・嘉納治五郎』と題して2011年に筑波大学出版会より出版した書が「Japan Library」により選定され再出版された訳本であり, 永木耕介担当部はP.190-P.203である。
- 『リファレンスブック』, 平野裕一, 2019年6月13日, 日本スポーツ協会, pp156-176, pp192-201, 身体のしくみと働きとスキルトレーニングについて
- 『グッドコーチになるためのココロエ』, 平野裕一, 土屋裕睦, 荒井弘和共編, 2019年7月12日, 培風館, スポーツのコーチングに求められる人間力と知識技能について
- 『勝ちへのこだわり』, 「みんなのスポーツ」2019年7月号, 園山和夫編, 2019年7月1日発行, 日本体育社, 寄稿 VRを利用した勝敗の見極めがどう突き詰められてきたか, 山本浩
- 『グッドコーチになるためのココロエ』, 平野裕一, 土屋裕睦, 荒井弘和共編, 2019年7月12日, 培風館, コラム:スポーツのコーチングに求められる人間力と知識技能について, 山本浩
- 『大敗北から立ち上がる』, 体育の科学8月号, 荒井弘和編, 2019年8月10日, スポーツにおけるネガティブ体験の価値, 杏林書院, 山本浩
- (寄稿)『羅針盤』, 山陰中央新報, 山陰中央新報社, 2019年5月-2020年3月, スポーツに関するコラム(6週に一度掲載), 山本浩
- 『グッドコーチになるためのココロエ』, 平野裕一, 土屋裕睦, 荒井弘和共編, 2019年7月12日, 培風館, コラム:他種目に対するコーチング, 杉本龍勇

## 2. 論文

- 『大学野球選手のシーズン中の肩関節可動域』, 伊藤マモル, 森嶋琢真, 由井嶺太, 2020年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第38号, p.45-54, 野球選手の肩関節周辺のスポーツ傷害の予防に資するセルフ・スクリーニングの情

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

報として指椎間距離測定法に着目し、シーズン中の変化の特徴を検討した。

- 『大学野球選手を対象とした無侵襲非観血的ヘモグロビン測定装置によるヘモグロビン濃度の継続的測定結果』, 伊藤マモル, 杉本恵子, 吉川恵美, 2020年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第38号, 37-44, 大学野球選手のコンディショニング指導の基礎資料として, 試合期におけるヘモグロビン濃度の変動を把握する目的で, 無侵襲非観血型測定装置を用いて検討した。
- 『大学生アスリートは受傷したチームメイトをどう認知しているか?』, 鈴木郁弥・清水智弘・泉重樹・荒井弘和, 埼玉アスレチック・リハビリテーション研究会誌, 2019年10月, 10, P.21-P.25.
- 『単純反応課題との複合が垂直跳び高のグレーディングに及ぼす影響』, 宮本健史, 木塚朝博, 林容市, 小野誠司, 2019年6月10日, 体育学研究 64 (1), p. 49-p. 57, 任意のタイミング (優先条件) および単純反応 (高速条件) の両条件下における垂直跳びのグレーディング能力について検討し, 跳躍のグレーディング能力は優先条件と比較して高速条件でより低下する可能性を示した。
- 『感覚系の特性に関連した最近の課題』, 林容市・田中喜代次, 2019年8月1日, 電子情報通信学会 102 (8), P. 801-P. 804, 身体感覚がスポーツ種目や運動の種類, 個人の体力や過去の運動習慣などから影響を受けることを踏まえ, 身体活動やスポーツ時における全身的な努力感覚・疲労感覚の適切な測定や評価の重要性を解説した。
- 『病院内におけるメディカルフィットネスの実際と効果』, 田中喜代次, 林容市, 中垣内真樹, 2019年11月, 未病と抗老化 28, p. 44-P. 48, 特に虚血性心疾患患者らを対象とした約30年間の病院内監視型運動教室の効果について, 総合的体力指標などに着目して検討し, 運動種目, 強度, 頻度, などとの関係について解説した。
- 『在校生の大学スポーツに対する評価が大学への帰属意識に与える影響』, 杉本龍勇, 2020年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 38 pp55-67, 大学スポーツが大学のブランディングに対するプロモーションツールとして活用されるケースが多く見られるようになってきているが, その効果については多くは検証されていない。そこで本研究では, 大学スポーツの大学ブランディングに与える影響について検証した。結果として, 在校生における大学体育会の認知度は低く, 大学に対する満足度と大学体育会の活躍にはそれほど強い相関は見られなかった。しかし, スポーツ実施やスポーツ観戦に対する興味が強まると体育会への関心度も高まり, これらには相関関係があることが示された。こうした点から, スポーツ全般に対する興味や関心の醸成が大学スポーツの価値を高めと思われる。
- 『バレーボールが持っている魅力の可視化』, 山田 快・榎本恭介・荒井弘和, 2019年6月, バレーボール研究 P.7-P.13, バレーボールに携わった経験の少ない者がバレーボールに内在する, どのような点に魅力を感じるかについて調査を行った結果, それは大きく6つの魅力に集約されることが明らかになり, バレーボールの参画者増大に向けては, 今後抽出された6つの魅力を考慮したインストラクションが重要になることが示唆された
- 『チームの一体感が競技意欲の予測因となり得るか?』, 山田 快, 2020年3月, コーチング学研究 P.207-P.217, スポーツチームの一体感がチームに所属するアスリート個人の競技意欲を予測するかについて検討した結果, チームの一体感から直接的に競技意欲を予測することは難しいものの, コレクティブエフィカシーやスポーツコミットメントといった関連要因を介し, 間接的に予測することは可能であり, アスリートの競技意欲向上・改善に当たって, チームの一体感が貢献することが示唆された
- 『陸上長距離選手のパーソナリティに関する検討』中澤 史・梶内大輝・佐藤友哉・松岡悠太, 2020年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第38号, P.15-P.18.
- 『バスケットボール選手における練習時のパフォーマンスに他者の存在が及ぼす影響』和田拓真・中澤 史・坂入洋右, 2020年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要第38号, P.19-P.23.
- 『Supplementation of eicosapentaenoic acid-rich fish oil attenuates muscle stiffness after eccentric

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

- contractions of human elbow flexors』, Tsuchiya, Y., Yanagimoto, K., Ueda, H., Ochi, E., 2019年04月, “Journal of the International Society of Sports Nutrition” 16(1), pp.19-
- 『Two and four weeks of b-Hydroxy-b-Methylbutyrate (HMB) supplementations reduce muscle damage following eccentric contractions』, Tsuchiya, Y., Hirayama, K., Ueda, H., Ochi, E., 2019年05月, “Journal of the American College of Nutrition” 38(4), pp.373-379
  - 『先端工学を活用した脚のむくみ(浮腫)の包括的評価とその応用 —スポーツ用弾性靴下の効果と作用機序の検討—』, 佐々木一茂, 越智英輔, 2019年06月, 『デサントスポーツ科学』 40, pp.155-164
  - 『Short-term cycling restores endothelial dysfunction after resistance exercise』, Takuma Morishima, Motoyuki Iemitsu, Eisuke Ochi, 2019年4月, Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports. 29(8): 1115-1120. レジスタンス運動後における血管内皮機能の低下はレジスタンス運動後に 10 分間の有酸素性運動を行う事で回復できる事を明らかにした。
  - 『Effect of home-based high-intensity interval training and behavioural modification using information and communication technology on cardiorespiratory fitness and exercise habits among sedentary breast cancer survivors: habit-B study protocol』, Tsuji, K., Ochi, E., Okubo, R., Shimizu, Y., Kuchiba, A., Ueno, T., Shimazu, T., Kinoshita, T., Sakurai, N., Matsuoka, Y., 2019年08月, “BMJ Open” (8), e030911-
  - 『Eicosapentaenoic acid (EPA) and docosahexaenoic acid (DHA) in endurance performance and cardiovascular function』 (invited review), Tsuchiya, Y., Ochi, E., 2019年11月, “Exercise Science” 28(4), pp.317-323
  - 『Eight weeks of fish oil supplementation does not prevent sitting-induced leg endothelial dysfunction』, Takuma Morishima, Yosuke Tsuchiya, Jaume Padilla, Eisuke Ochi, 2019年5月, Applied Physiology, Nutrition, and Metabolism. 45(1):55-60. 8週間にわたる n-3 系脂肪酸の摂取は座位による血管内皮機能の低下を予防できない事を明らかにした。
  - 『Eccentric contraction-induced muscle damage in human flexor pollicis brevis is accompanied by impairment of motor nerve』, Ochi, E. (corresponding author), Ueda, H., Tsuchiya, Y., Kouzaki, K., Nakazato, K., 2020年03月, “Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports” 30(3), pp.462-471
  - 『Physical characteristics and fitness in elite collegiate baseball players in Japan: Comparison of pitchers vs. fielders』, Morishima, T., Ito, M., Tsuchiya, Y., Ueda, H., Ochi, E., 2020年03月, “Gazzetta Medica Italiana Archivio per le Scienze Mediche” 179(3), pp.136-42
  - 『腰椎椎間板変性を有する大学男子硬式野球選手の身体特徴』 . 田口直樹, 宮川俊平, 泉 重樹: 日本臨床スポーツ医学会誌. 27(3), 481-488, 2019
  - 『大学アスリートを対象とした脳震盪経験の実態調査』 . 泉 重樹, 鈴木郁弥, 荒井弘和, 梅下新介: 法政大学スポーツ健康学研究. (10), 1-7, 2019-03
  - 『大学サッカー一部に対する Jones 骨折検診の経験』 . 瀬戸宏明, 泉 重樹, 平野祐貴: 法政大学スポーツ健康学研究. (10), 9-14, 2019-03
  - 『野球打撃動作における腰部回旋挙動解析』 . 田口直樹, 金岡恒治, 泉 重樹, 宮川俊平: 日本臨床スポーツ医学会誌. 27(1), 11-19, 2019

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

●『The differing effects of promoting sport events on the destination image of a city around the world』(原著論文), Heere, B., Wear, H., Jones, A., Breitbarth, T., Xing, X., Salcines, J.L.P., Yoshida, M., & Derom, I., 2019年11月, Journal of Sport Management, 33 (6) : 506-517, 自転車競技大会(ツールドフランス)が開催地の観光イメージに与える影響の検証。

●『2019年度スポーツコーチング海外演習(欧州)報告書』, 井上尊寛・川田尚弘・久保田弓友, 2020年3月30日, 法政大学スポーツ健康学研究, 第11号, p49-58. 内容: 2019年9月12日から9月18日の7日間, ドイツとスペインにてスポーツコーチング海外実習を実施した。本稿においては, 具体的な内容と, 両国の比較などを報告として取りまとめたものである。

●『2019年度スポーツ研究センター主催 サッカー教室報告』, 井上尊寛・中澤史・中一尚斗, 2020年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要, 第38号, p73-76. 内容: 2019年度2回にわたり実施した。法政大学スポーツ研究センター主催のサッカー教室について, その概要を記すとともに, 併せて実施した調査に関する報告もおこなう。具体的には大学近隣に居住する小学生(4-6年生)のサッカー選手を対象とした身体的および心理的なテストを行った。

●『スポーツ観戦関与と消費者知識について: 精通性に着目して』井上尊寛・松岡宏高, スポーツ科学研究, (現在投稿中), 内容: 消費者は目的を達成するため, 問題が生じたときに多くの情報を収集し, それを処理し行動を決断するという情報処理をする必要があり, 製品に関連した経験量などの精通性が関与の程度に影響を与えることが示されている。そこで本研究では, (1) スポーツ観戦者の知識(消費者知識)の中でも特に精通性に着目し, それらを構成する要素を抽出し, モデルとしての妥当性や信頼性を検証すること, (2) 精通性とスポーツ観戦関与との関連性を検証し, 一連のモデルとしての妥当性に関する証左を得ることの2つを目的とした。調査は日本プロサッカーリーグに所属する3つのクラブのスタジアム観戦者に対して行い, 1,217票の回答が得られた。分析の結果から, 精通性モデルの妥当性および精通性とスポーツ観戦関与との関連妥当性が確認された。さらに, 精通性とスポーツ観戦関与との関係について, 精通性はスポーツ観戦関与に影響を与え, 特に抽象化水準の高い要因に対して強い影響を与えることが示唆された。

●『Prior cycling exercise does not prevent endothelial dysfunction after resistance exercise』, Takuma Morishima, Masahira Toyoda, Eisuke Ochi, 2019年5月, European Journal of Applied Physiology. 119(7): 1663-1669. レジスタンス運動後における血管内皮機能の低下は事前の有酸素性運動では予防できない事を明らかにした。

●『Sitting-induced endothelial dysfunction is prevented in endurance-trained individuals』, Takuma Morishima, Yosuke Tsuchiya, Hisashi Ueda, Katsunori Tsuji, Eisuke Ochi, 印刷中, Medicine and Science in Sports and Exercise. 有酸素性アスリートでは座位による血管内皮機能の低下は生じない事を明らかにした。

### 3. 学会発表

●『価値が明確な大学生アスリートは幸せか?』, 日本スポーツ心理学会47回大会, 2019年11月16日, 筑波大学(茨城県), 荒井弘和・深町花子・榎本恭介

●『把握の調整力発揮時の測定時間と運動習慣との関係』, 日本体育学会第70回大会, 2019年9月11日, 慶應義塾大学(東京都), 林容市・若田部瞬, 目標値に対して発揮された把握力の精度と測定時間を調べ, 精度は目標値が大きいほど小さくなる一方で測定時間は逆に延長することを示した。

●『学校現場が子どもの体力向上を能動的に進めるためのヒント』, 日本体育学会第70回大会, 2019年9月11日, 慶應義塾大学(東京都), 山田 稔・林容市・山田快, 関東圏にある小学校, 中学校の教員を対象に児童・生徒の体力に関する質問紙調査を実施し, 学校が子どもの体力向上を推進するために, 教員が体力を要素ではなく包括的かつ多角的に理解する必要性が高いことが示唆された。

●『運動中の意識の違いが運動に伴う努力感覚と感情に与える影響』, 日本体育測定評価学会第19回, 2020年3月1日,

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

福井大学（福井県）、若田部舜，土屋芽生，林容市，有酸素性運動中に異なる方法で聴取する音楽を意識させても，運動中の努力感覚において条件による有意な変化は認められず，各感情においても条件による有意な変化は認められないことを明らかにした。

●『音楽に合わせた高強度運動における音楽テンポが生理指標および心理指標に及ぼす影響』，日本体育測定評価学会第19回，2020年3月1日，福井大学（福井県），土屋芽生，若田部舜，林容市，宮本健史，白井祐介，健康な大学生に音楽テンポの異なる高強度のレスンプログラムを実践させたところ，心拍数や運動強度および気分尺度は運動によって変化した一方で，楽しさ，水分摂取量，および主観的作業量にはテンポの違いによる影響は認められなかった。

●『Team Unity as a Predictor of Athlete Competitive Motivation』，24th Annual Congress of the European College of Sport Science，2019年7月4日，The Prague Congress Centre（チェコ），Kai Yamada，上記論文「チームの一体感は競技意欲の予測因となり得るか？」の内容を国際学会（英語）にて報告した

●『グッドコーチ像の照合—アスリートはどのようなコーチを求めているのか—』，日本スポーツ心理学会・第46回大会，2019年11月16日，筑波大学（茨城県），山田 快・堀本菜美，コーチの卵である大学生アスリートがどのような特徴を備えたコーチを優れていると感じているのかについて調査を行ったところ，「アスリートへの理解を深める」といった81の特徴が抽出，それらは18に集約されることが示唆され，抽出された特徴は今日わが国のコーチ育成の指針となっている，モデル・コア・カリキュラムに示された「グッドコーチ像」の内容と概ね一致することが確認された

●『ソフトテニス選手におけるサーブ時のルーティンワークの介入効果についての検討』日本体育学会第70回大会，2019年9月12日，慶応義塾大学（神奈川県），佐藤友哉・松岡悠太・中澤 史。

●『中学生サッカー選手のパーソナリティ特性に関する検討』日本体育学会第70回大会，2019年9月12日，慶応義塾大学（神奈川県），松岡悠太・佐藤友哉・中澤 史。

●『ソフトテニス選手におけるサーブ時のルーティンワークの介入効果についての検討』日本スポーツ心理学会第46回大会，2019年11月17日，筑波大学（茨城県），佐藤友哉・松岡悠太・中澤 史。

●『中学生サッカー選手のパーソナリティに関する検討 —ポジションに着目して—』日本スポーツ心理学会第46回大会，2019年11月17日，筑波大学（茨城県），松岡悠太・中澤 史。

●『陸上長距離選手のパーソナリティに関する一考察』日本スポーツ心理学会第46回大会，2019年11月17日，筑波大学（茨城県），中澤 史・梶内大輝・佐藤友哉・松岡悠太。

●『構成的グループエンカウンターを取り入れたスポーツ実技系授業が大学新生のコミュニケーション・スキルに与える影響について』日本スポーツ心理学会第46回大会，2019年11月17日，筑波大学（茨城県），福井邦宗・中澤 史。

●『中学生サッカー選手のパーソナリティ特性に関する一考察 - ポジションに着目して -』九州スポーツ心理学会第33回大会，2020年3月8日，福岡大学（福岡県），松岡悠太・中澤 史。

●『Short-term cycling restores endothelial dysfunction after resistance exercise』，66th Annual Meeting of American College of Sports Medicine (Orlando, USA) 2019-5, Morishima, T., Iemitsu, M., Ochi, E. レジスタンス運動後における血管内皮機能の低下はレジスタンス運動後に10分間の有酸素性運動を行う事で回復できる事を明らかにした。

●『Motor nerve conduction velocity with eccentric contractions of flexor pollicis brevis muscle』，66th Annual Meeting of American College of Sports Medicine (Orlando, USA) 2019-5, Ochi, E., Ueda, H., Tsuchiya, Y., Kouzaki, K., Nakazato, K.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し，回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は，前年度から「S：さらに改善した，A：従来通り，B：改善していない」を意味する。

- 『Fish oil supplementation attenuates muscle stiffness after eccentric contractions of human elbow flexors』, 2019 NSCA National Conference (Washington, D.C., USA) 2019-7, Ochi, E., Ueda, H., Tsuchiya, Y.
- 『Fast velocity eccentric cycling causes greater muscle damage than slow velocity eccentric cycling』, 2019 NSCA National Conference (Washington, D.C., USA) 2019-7, Ueda, H., Tsuchiya, Y., Ochi, E.
- 『持久性アスリートは長時間の座位後に血管内皮機能が低下しない』, 第74回日本体力医学会(於 茨城県), 2019-9, 森嶋琢真, 土屋陽祐, 植田央, 街勝憲, 越智英輔. 有酸素性アスリートでは座位による血管内皮機能の低下は生じない事を明らかにした。
- 『Effect of home-based high-intensity interval training and behavioral modification using information and communication technology on cardiorespiratory fitness and exercise habits among sedentary breast cancer survivors: the habit-B randomized controlled trial in progress』, 42nd Annual San Antonio Breast Cancer Symposium (SABCS), (San Antonio, TX, USA) 2019-12, Tsuji, K., Ochi, E., Shimizu, Y., Kuchiba, A., Narisawa, T., Ishino, Y., Okubo, R., Ueno, T., Shimazu, T., Kinoshita, T., Sakurai, N., Matsuoka, Y.
- 『Oncology care providers' attitudes, practices, barriers and facilitators of physical activity promotion in breast cancer survivors: A nation-wide cross sectional web-based survey』, 42nd Annual San Antonio Breast Cancer Symposium (SABCS), (San Antonio, TX, USA) 2019-12, Shimizu, Y., Tsuji, K., Ochi, E., Okubo, R., Shimazu, T., Tatematsu, N., Sakurai, N., Iwata, H., Matsuoka, Y.
- 『腰痛の既往歴と機能的な動作は関連するのか』. 第8回日本アスレティックトレーニング学会学術集会. 東京. 泉重樹, 平野莉奈, 春日井有輝, 瀬戸宏明: 2019.07.20-21
- 『女子新体操選手70名を対象にした傷害調査』. 第8回日本アスレティックトレーニング学会学術集会. 東京. 玉木涼祐, 泉重樹, 佐藤祐輔: 2019.07.20-21
- 『Muscle activity of lower extremities and the trunk while doing unilateral squats with ViPR』. European College of Sports Science, Prague. Shigeki Izumi, Kotoko Shirakawa, Naoki Taguchi, Yuki Kasugai: 2019/7/3-6
- 『スポーツ選手を対象とした鍼灸治療の有害事象調査 競技に支障をきたすトラブルに着目して』. 第68回全日本鍼灸学会学術大会, 名古屋. 藤本英樹, 金子泰久, 泉重樹, 櫻庭陽, 吉田行宏, 鳥海崇, 池宗佐知子, 玉地正則, 吉田成仁, 近藤宏, 古屋英治: 2019年5月10-12日.
- 『鍼灸治療直後の評価に着目したスポーツ選手の肉離れに対する鍼灸治療』. 第68回全日本鍼灸学会学術大会, 名古屋. 泉重樹: 2019年5月10-12日.
- 『フィジカルチェックの普遍化に向けて マーカーレス3Dセンシングデバイスを用いた試み』. 第36回スポーツ選手のためのリハビリテーション研究会研修会, 岡山市. 佐藤祐輔, 泉重樹, 水野敬太, 佐藤正紘, 織戸英佑: 2019年3月17日.
- 『スポーツ観戦と活力社会の実現』日本マーケティング学会カンファレンス2019: スポーツマーケティング研究会, 2019年10月, 法政大学市ヶ谷キャンパス, 東京, 吉田政幸, スポーツ観戦が人々の身体的ウェルビーイング(活力)に与える影響の検証.
- 『Integrating organizational social capital into team identification research: A longitudinal study』The annual conference of the Asian Association for Sport Management, 2019年8月, Tokyo, Japan, Yoshida, M., Gordon, B., & James, J.D., チームアイデンティフィケーションとソーシャルキャピタルの統合: 縦断的検証.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

● 『Service quality in spectator sports: A meta-analytic review and assessment of its impact on fan outcomes』  
The 33th Conference of the North American Society for Sport Management, New Orleans, LA., USA, 2019, 年6月,  
Biscaia, R., Kim, Y.K., & Yoshida, M., スポーツ観戦イベントにおけるサービスクオリティのメタ分析。

● 『スポーツ観戦関与と観戦知識について』 井上尊寛・吉田政幸・岩村聡・吉岡那於子・仲澤眞, 日本フットボール学会第17回大会, 2019年12月, 大東文化大学東松山キャンパス (埼玉県)。

内容: 本研究は以下の2つを目的とした。①スポーツ観戦者の知識(観戦知識)を構成する要素を抽出し, モデルとしての妥当性や信頼性を検証すること。②観戦知識と観戦関与の関連性を検証し, 一連のモデルとしての妥当性に関する証左を得ること。これらのことから, スポーツ観戦者に対する知識と関与の関係性を明らかにし, スポーツ消費者行動研究における新たな知見を得ること, およびチームマネジメントに資する情報の収集及び分析を目的とする。本研究では, スタジアム観戦者の観戦知識の構造と関与との関係を検証するために, 日本プロサッカーリーグ(以下Jリーグと略す)のそれぞれのカテゴリー(J1リーグ・J2リーグ・J3リーグ)に所属する3つのクラブのスタジアム観戦者に対して調査(自計式質問紙調査)を実施した。モデルの妥当性の検証を行ったところ, モデルの適合度を判断する指標を満たしたことから, その妥当性が確認された。次に, 観戦知識と関与との関係において, 娯楽性, 連帯性などの快楽的要因への影響よりも, 場所への帰属性, 象徴性などの自己表出的要因への影響が強く示された。ただし, 快楽的要因の一つである中心性は, 自己表出的要因への強い関連性が認められていることから(井上ら, 2018), 観戦知識は関与に影響を与え, 特に抽象化水準の高い要因に対して強い影響を与えることが示唆された。

● 『Jリーグ杯決勝戦観戦者の動向』, 渡部海帆・射場雛子・吉岡那於子・吉田政幸・井上尊寛・岩村聡・仲澤眞, 日本フットボール学会第17回大会, 2019年12月, 大東文化大学東松山キャンパス (埼玉県)。

● 『Jリーグ観戦者のアウェイスタジアムにおける観戦経験』吉岡那於子・岩村聡・吉田政幸・井上尊寛・仲澤眞, 日本フットボール学会第17回大会, 2019年12月, 大東文化大学東松山キャンパス (埼玉県)。

● 『Jリーグ観戦者のスタジアム滞留時間』仲澤眞・吉田政幸・井上尊寛・村田真一・岩村聡・吉岡那於子, 日本フットボール学会第17回大会, 2019年12月, 大東文化大学東松山キャンパス (埼玉県)。

● 『短時間のサイクリングはレジスタンス運動後における血管内皮機能の低下を回復させる』, 第27回日本運動生理学会大会, 2019年7月, 広島大学(広島県), 森嶋琢真, 家光素行。レジスタンス運動後における血管内皮機能の低下はレジスタンス運動後に10分間の有酸素性運動を行う事で回復できる事を明らかにした。

以上

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

### ③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)

氏名: 荒井弘和

※2019年度に引用された論文

『グッドコーチになるためのココロエ』, 1件

氏名: 林 容市

※2019年度に引用された論文

『A single bout of exercise at higher intensity enhances glucose effectiveness in sedentary men』, 2件

※受賞

『就学段階ごとの運動経験が大学生における把握の調整力に及ぼす影響』日本体育測定評価学会 令和元年度学会賞

氏名: 杉本龍男

※2019年度に引用された論文

『学生の体育会活動に対する意識調査』法政大学スポーツ研究センター紀要, 36: 引用3件

氏名: 越智 英輔

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

※2019年度に引用された論文

Reseachgate : 79 件

Google Scholar : 117 件

氏名 : 永木 耕介

※2019年度に引用された論文

『嘉納柔道思想の継承と変容』 引用 3 件

氏名 : 森嶋 琢真

※2019年度に引用された論文

『Whole body, regional fat accumulation, and appetite-related hormonal response after hypoxic training』(論文), 引用 9 件

『4 Weeks of high-intensity interval training does not alter the exercise-induced growth hormone response in sedentary men』(論文), 引用 1 件

『Effects of different periods of hypoxic training on glucose metabolism and insulin sensitivity』(論文), 引用 2 件

『Effect of sprint training: Training once daily versus twice every second day』(論文), 引用 1 件

『Compression garment promotes muscular strength recovery after resistance exercise』(論文), 引用 7 件

『Impact of exercise and moderate hypoxia on glycemic regulation and substrate oxidation pattern』(論文), 引用 8 件

『Augmented carbohydrate oxidation under moderate hypobaric hypoxia equivalent to simulated altitude of 2500 m』(論文), 引用 2 件

『Endothelial dysfunction following prolonged sitting is mediated by a reduction in shear stress』(論文), 引用 13 件

『Ghrelin, GLP-1 and leptin responses during exposure to moderate hypoxia』(論文), 引用 2 件

『Prolonged sitting-induced leg endothelial dysfunction is prevented by fidgeting』(論文), 引用 4 件

『Prior exercise and standing as strategies to circumvent sitting-induced leg endothelial dysfunction』(論文), 引用 7 件

『High-intensity resistance exercise with low repetitions maintains endothelial function』(論文), 引用 3 件

『Eicosapentaenoic acid-rich fish oil supplementation inhibits the decrease in concentric work output and muscle swelling of the elbow flexors』(論文), 引用 2 件

『Short-term cycling restores endothelial dysfunction after resistance exercise』(論文), 引用 1 件

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び 2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

※2019 年度中に応募した科研費等外部資金

【科学研究費助成事業】 合計 8 件

- ・ 基盤研究（A） 1 件 越智（分担）
- ・ 基盤研究（C） 6 件 杉本・吉田（康）・越智（分担）・永木・泉・井上
- ・ 若手研究 1 件 山田

※2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（継続含む）

【科学研究費助成事業】 合計 8 件

- ・ 基盤研究（A） 1 件 越智（分担）
- ・ 基盤研究（B） 1 件 越智（分担）
- ・ 基盤研究（C） 3 件 荒井・越智・永木
- ・ 若手研究（B） 1 件 吉田（政）
- ・ 若手研究 1 件 森嶋
- ・ 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化) 1 件 越智

【科学研究費助成事業以外の公的研究費】 合計 1 件

- ・ (公財) 日本スポーツ協会 2019 年度スポーツ医・科学研究プロジェクト 1 件 平野

-----\* 詳細 \*-----

氏名： 荒井弘和

(継続) 『科学研究費補助金 基盤研究(C)』, 500,000 円

氏名： 山田 快

(応募) 『令和 2 年度科学研究費助成事業 (若手研究)』

氏名： 杉本龍勇

(応募) 『科学研究費 基盤 C 一般』

氏名： 吉田康伸

(応募) 『科学研究費 基盤 C 一般』

氏名： 越智 英輔

(応募) (研究分担者として：新規) 科学研究費補助金 基盤研究(A)

(応募) (研究分担者として：新規) 科学研究費補助金 基盤研究(C)

(継続) 『遺伝的要因が伸張性運動前後の筋・関節機能に及ぼす影響』 科学研究費補助金 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化) (代表研究者：継続)

(継続) 『弾性タンパク質コネクチン(タイチン)が伸張性収縮前後の筋・関節機能に及ぼす影響』 科学研究費補助金 基盤研究 C (代表研究者：継続)

(継続) 『伸張性収縮後の筋肉痛・筋力低下の神経科学的研究』 科学研究費補助金 基盤研究 B (分担研究者：継続)

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(採択)『サルコペニアに伴う骨格筋の質的变化：メカニズムと有効な対策』 科学研究費補助金 基盤研究 A (分担研究者:新規)

氏名：泉 重樹

(応募)『科学研究費 基盤 C 一般』

氏名：永木 耕介

(応募) → (採択)『科学研究費 基盤 C 一般』

研究課題「隠された？嘉納治五郎の柔道思想-オリンピックの柔道採用をめぐる戦前と戦後の変化」

(2020 年度～2022 年度 採択 研究代表者 2,658,000 円) →2019 年度末に決定

氏名：平野 裕一

(採択)『発育期のスポーツ活動のあり方に関する研究～アスリート育成モデルの構築～』(公財) 日本スポーツ協会 令和 2 年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究プロジェクト, 2,300,000 円

氏名：吉田政幸

(継続)『科学研究費, 若手研究 (B)』, 計 2,080,000 円.

氏名：井上尊寛

(応募)『科研費 基盤研究 C』

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・研究における所員の協働による包括的な研究テーマを決め、学術研究振興資金に申請した。残念ながら申請は採択されなかったが、所員同士による共同研究を今後も促進する。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・ホームページの運用。更新頻度を増すため、活動状況等を掲載するように努める。	

【この基準の大学評価】

2019 年度のスポーツ研究センターの研究その他の諸活動については、プロジェクト 8 件、対外的活動 71 件、出版物・学会発表・論文掲載など研究成果の公表 101 件、研究成果の引用および受賞の確認 268 件、科研費等外部資金獲得 9 件が報告されており、本学を代表する成果を上げていると言っても過言ではない。この点は、対外発信、社会的評価、外部資金への応募とその獲得という 3 つの観点から高く評価できる。外部評価の観点から見ても、学内の質保証委員会により一定の評価を得ていることが示されている。

しかし、外部資金獲得においては不採択とされた研究プロジェクトもあり、また、対外発信においてもホームページ上の情報発信のさらなる工夫をめざすとしており、それらへの取り組みと成果が期待される。

III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。
	年度目標	研究センター内での勉強会やセミナーを開催頻度を上げ、各所員の研究についての積極的な

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		意見交換を通じてさらに新たなアイデアの創出に努める。そして、研究における連携及び相互作用を創出する
	達成指標	共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部資金獲得を目指す。
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	本年度の研究センター内での研究プロジェクトは9本が申請され、活発に研究が行われている。また研究センターとしての包括的なプロジェクトとして、日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金に応募しており、共同研究の面でも活性化している。
	改善策	研究センター内での勉強会やセミナーの頻度を昨年度よりも増やすことが出来なかった。所属している各研究員の所属学部都合などによって、日程調整が上手く調整できなかった。この点を来年度は改善したい。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上貢献する。
	年度目標	SSIのカリキュラムとして、昨年と同様に「オリンピック・パラリンピックを考える」が開講される。そこで2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、競技以外の側面でも社会貢献できるよう教育内容の向上を図る。
	達成指標	法政スポーツの競技力および社会性の両面における外部からの評価が高まるよう、強化・育成に努める。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	これまで継続してきた公開講座も開催することができ、地域スポーツの活性化に努めた。またSSIのカリキュラムとして開講された「オリンピック・パラリンピックを考える」に複数の研究員が登壇し、講義を行った。公開講座のため、体育会学生以外の学生にもオリンピック・パラリンピックを含めたスポーツについて啓蒙を行った。
改善策	公開講座の数を増やすだけでなく、講座の内容の向上に努め、参加者の満足度が向上するように努める。	
<b>【重点目標】</b>		
研究活動における連携および相互作用の活性化により、外部資金の獲得を目指す。本年度も学術研究振興資金に応募する事を予定している。		
<b>【年度目標達成状況総括】</b>		
年度目標については概ね達成することが出来た。研究センターの共同プロジェクトとして申請している外部資金の獲得は不採択となったが、今後も共同研究を更に促進していきたい。特に本学体育会への競技面ならびにキャリア構築の2つの側面に対する共同研究を活性化させ、体育会活動が競技力強化のみに留まらず、人間力の醸成にも機能を果たすことができる様にサポートをしていきたい。またこうしたサポートを通じて体育会の価値向上につながるようにしていき、これが大学のブランド価値向上に貢献できるように努めたい。		

**【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】**

2019年度のスポーツ研究センターの研究活動における年度目標は外部資金獲得にねらいを定めたものであったが、その達成指標に照らして、ほぼ適切に達成されたとしてA評価を下している。この点は評価できる。しかし、不採択1件を見たこと、また、所員の多忙な勤務の中での日程調整の困難さから主催事業の向上に支障を生じているとの問題点も示されている。これらの問題点は、貴センターが有する人的資源と2021年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックとをふまえて、解消に向けた中長期的な取り組み、工夫・施策が期待される。社会貢献・社会連携における年度目標は学内外に向けた公開講座の開設をめざしたものであったが、その達成指標に照らして、適切に達成されたとしてS評価を下している。この点は、高く評価できる。そして、さらなる課題として、体育会を通してアスリートの育成・アスリートの人間力強化（セカンド・キャリア形成にも対応）・大学ブランド化への貢献意識と実践方針とが示されており、その成果が期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

IV 2020 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。
	年度目標	昨年は、様々な事情により研究センター内での勉強会やセミナーの開催頻度を上げることができなかった。これを反省し、今年度はこれらの開催頻度を上げ、積極的な意見交換を通じて各所員の研究に役立てる。また、所員同士の研究における連携及び相互作用を創出するよう努める。
	達成指標	共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部資金獲得を目指す。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上に貢献する。
	年度目標	SSI のカリキュラムとして、一昨年、昨年と同様に「オリンピック・パラリンピックを考える」が開講される。そこで2021年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、競技以外の側面でも社会貢献できるよう教育内容の向上を図る。
	達成指標	法政スポーツの競技力および社会性の両面における外部からの評価が高まるよう、強化・育成に努める。
<p>【重点目標】</p> <p>研究センター内でセミナーおよび勉強会の開催頻度を増やす。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>新型コロナウイルスの感染者数の状況次第で確定しにくい部分はあるが、各所員の都合にフレキシブルに対応し、オンラインミーティングなどを活用しながら開催する。</p>		

【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

<p>スポーツ研究センターの研究活動における中期目標は所員一体となったプロジェクトを立ち上げ、社会問題解決に取り組むというものであり、2020 年度目標とその達成指標はそれをうけて、また 2019 年度までの取り組みをふまえて、所員参加の勉強会やセミナー開催頻度の上昇、共同プロジェクトの構築、外部資金獲得を定めている。それぞれが適切に対応し整合性が取れていることは評価できる。社会貢献・社会連携における中期目標は公開講座の持続、アスリートの育成とそのセカンドキャリア形成への取り組み、そして大学ブランド化への貢献を定め、年度目標とその達成指標はそれをうけて、また 2019 年度までの取り組みをふまえて、2021 年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックの競技と競技以外への貢献を定めている。それぞれが適切に対応し整合性が取れていることは評価できる。研究活動、社会貢献・社会連携いずれも具体的であり、検証可能のみならず検証結果の明解性も読み取れるものとなっている。重点施策として、世界規模の問題となっている新型コロナウイルス感染問題への対応策が示され、貴センターの活動の持続性と質の維持に向けた姿勢が示されていることも、高く評価できる。</p> <p>年度末における成果を期待したい。</p>
---

【大学評価総評】

<p>スポーツ研究センターは、2019 年度の大学評価委員会の評価結果への対応、研究活動、年度目標の達成状況、いずれの観点から見ても優れた成果を上げていると評価できる。</p> <p>すでにほぼ完備した体制を構築しており、研究成果の公表（学術貢献）、アスリートというスポーツ・エリートの育成（国内外への貢献）、公開講座・一般向け指導や講習（社会貢献）、大学ブランド化と外部資金獲得（大学への貢献）、勉強会・セミナー（自己研鑽・自己検証）などにおいて学内外の評価を得てきている。その意味で、本学を代表する組織の一つであると言っても過言ではない。それでもなお問題点の洗い出しと課題の設定（たとえばホームページの充実化など）を持続的に行い、改善・向上をめざす姿勢は高く評価できる。2020 年度目標とその達成指標は適切に設定されている。上記東京オリンピック・パラリンピックとそれ以後の時代の本学と国内外とに貢献する貴センターの活躍に期待したい。</p>
---

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。